



おおみや トピックス



市HP内掲載記事へ

年齢	R2.12末(前月比)
0歳~14歳	1,311人(+8)
15歳~64歳	5,757人(-10)
65歳~	3,048人(-3)
合計	10,116人(-5)

大宮町の人口

開催中! 第4回ひな人形展

五十河地区の小町公園にて、『ひな人形展』が開催中です(詳細は下記のとおり)。これは、各家庭で役目を終えたひな人形を集めて展示するもので、今回で4回目を迎えました。

1月31日、地域住民や関係者が集まり、地区内外から集まったひな人形約750体の飾り付けを行いました。会場内には約300年前に作られた人形や、横3m、高さ約2.5mのひな壇が設置されています。2つとして同じ人形は存在しないと言われるほど、作られた時代や地域、また職人によって人形の容姿は異なります。飾り付けに参加された方は「人形を見ると歴史的な背景を感じられる」「よく見ると

細かい表情も違っておもしろい」と話していました。

「小町公園をもっと人の集まる場所にしよう」と4年前に始まったひな人形展は、毎年地区外からの来場者も多く、五十河地区や小町公園を知ってもらうきっかけとなっているようです。

新型コロナウイルス感染防止対策を徹底したうえで開催されています。ご来場の際は感染防止対策にご理解とご協力をお願いいたします。

期間 3月7日(日)まで
9時30分~16時 ※水曜休館
場所 小町公園「小町の舎」
(大宮町五十河302番地)



高さ約2.5m、幅3mのひな壇



約300年前に作られた人形



倉垣しあわせ米を手を持つ
アイルランド人の子ども
(アランさん提供)

※『農事組合法人 楽農くらがき』とは:
奥大野区民で構成される集落営農組織で、区内の農業を守り、次世代へ繋げるため、耕作放棄地をなくす取り組みや、移住者を受け入れる取り組みを進めており、なかでも新規就農者の受け入れに力を入れている。

『倉垣しあわせ米』がアイルランドへ
『農事組合法人 楽農くらがき』では、奥大野地区内にビオトープ田を設置し、環境保全と希少生物の保護を行うなど、自然に配慮した減農薬農法を用いた『倉垣しあわせ米』の栽培に取り組んでおられます。倉垣しあわせ米には「地域の幸せを多くの人に届けたい」、「多くの人と地域を繋げたい」という思いが込められています。そんな思いが込められた倉垣しあわせ米が、日本から約9,500km離れたアイルランドまで広がっています。楽農くらがきの活動に協力するアイルランド人のアラン・ケランさんが、母国に住む親戚に米を送ったそうです。これを機に、アイルランドとの繋がりができるかもしれません。今後の活躍に期待が持たれます。



豆まき中の様子

2021年は、124年ぶりに2日が節分の日となりました。大宮こども園では節分行事として、園児たちが自分の内面に潜む鬼(泣き虫鬼、いじわるをする鬼など)を書き出し、それに向かって新聞紙を丸めたもので豆まきを行いました。「登園時の泣き虫鬼」を追い払った園児は、翌日は泣かずに登園できたようす。

大宮こども園の節分

大宮こども園の節分
2021年は、124年ぶりに2日が節分の日となりました。大宮こども園では節分行事として、園児たちが自分の内面に潜む鬼(泣き虫鬼、いじわるをする鬼など)を書き出し、それに向かって新聞紙を丸めたもので豆まきを行いました。「登園時の泣き虫鬼」を追い払った園児は、翌日は泣かずに登園できたようす。

犬もマスク着用で

犬もマスク着用で
「コロナ終息祈願」



奥大野地区にある若宮神社の狛犬は、オリジナルのマスクを身に付け新型コロナウイルスの終息を祈っています。実際にご覧になった地域住民は「おもしろい。こんな時だからこそ、前向きな気持ちで過ごしていきたい」と話していました。

2月6日、三重・森本地域の様々な生物と共生した農で活動をしている龍谷大学政策学部が、令和2年度活動報告会を地域住民に向けてオンライン上で行いました。

平成27年より始まったこの取り組みは、地域と連携し「里山が持つ多面的な機能を再評価、活用による地域づくり」というテーマで活動されています。これまでの調査で地域内の水田で絶滅危惧種のゲンゴロウが発見され、それをきっかけに、ゲンゴロウな

どの様な生物と共生した農法で作られたお米「ゲンゴロウ郷の米」の生産が始まり、現在では道の駅などで販売されています。

今年度はコロナ禍で地域活動や住民との交流が中止になるなど、満足に活動ができませんでした。オンライン上での意見交換を複数回行うなど新しい形での取り組みを進めてこられ、左記の提案および報告がなされました。

大学からの提案・報告内容

- ①「生物調査シート」の作成：水田調査で発見された生物（約50種）を地域が把握できるようにしたもの
- ②「手引書」の作成：『ゲンゴロウ郷の米』の基本情報を記載したもの。
- ③龍谷メルシー(株)と連携したゲンゴロウ郷の米の受注販売の結果について
- ④ゲンゴロウ郷の米についての消費者アンケートの結果と分析について

※①、②については来年度も継続してより良いものを作成する予定で、③、④については今年度の結果を踏まえ、来年度の取組に活かしていかれる予定です。



令和2年度に実施した地域活動（左・右）

龍谷大学政策学部

きん こうじつ
金 紅実准教授

龍谷大学政策学部准教授で環境経済学を専門とする。初めて京丹後を訪れた際、三重・森本地域の田園風景に心を奪われファンに。大学と地域の連携事業を当初から支えてきた。中国出身で、地域のお母さんたちに他国の料理を教えるなど、地域住民とプライベートでも交流を持つ。



ふるさとである以上みんなが主人公

三重・森本地域には、都会にはない豊かな自然、自然の恵みで作られた農産物がたくさんあります。しかし、都会の人々は有難さも豊かさの意味を忘れたまま享受しています。連携事業を通して、都会の人々には地域の自然の豊かさ大切さを伝えること、地域の人々には身の回りの自然の恵みとその大切さを再発見する機会を作りた

と考えていました。連携が始まって5年が経過し、確実に学生の成長と地域の変化を感じました。学生が地域を知る1番の方法は地域を訪問すること、そしてそこで地域の方々と交流して、農業・農村の様々な活動を体験することです。当初は「大学や学生の資源をどのように地域活動に使えば良いか」「住み親しんだ地元の魅力は何か」などの視点を掴むのに苦戦し、地域が変化したと感じるまでに時間が必要でした。しかし、学生との協働を重ねるにつれ年々、地域内の自主性が結束力として現れ始めました。『三重・森本里力再生協議会』を中心に色々な住民団体が次から次へと発足され、それぞれが具体的な課題に対応しながらテーマをもって活動するようになりまし

た。しかしながら、活動を進める中で学生との協働、そして地域内の協働で得られた力を、より多くの住民と共有できておらず、十分に伝わっていないのが課題として感じています。今後は、各団体の役員のみではなく、全住民が自由に意見を交換できる場として、みんなのふるさとである以上みんなが主人公になって協力し合う力を集めるためにも、三重・森本地域の全住民ミーティング（ざっくばらんのワークショップ）を1年に1回でもよいので、開催できたらいいと思います。

三重・森本地域でつくられた『ゲンゴロウ郷の米』は本当においしいものです。地元では当たり前のもので珍しくないかもしれませんが、都会の人々にとっては本当においしい米であることは間違いありません。三重・森本地域は私の中で「第2のふるさと」としてすっかり安住しています。学生引率でももちろんのこと、個人としてもずっと付き合っていきたいです。豊かな自然に囲まれて地域伝来のスローフード・スローライフをぜひ意識をもって堪能しましょう。これまで築いてきた経験と成果を大事にしながら地域の持続可能性に活用していけることを願っています。